

おります。このようなことをここで申すことをお許しください。

第八三五五部隊、第一独立整備隊、慰霊之碑の裏面には次の文が刻まれております。

『満州杏樹ニテ航空機整備比島派遣隊野隊長以下  
一二五名編成昭和十九年六月十日出発、シー海峽ル  
ソン島バナイ島ニ転戦勇猛果敢屍乗越奮戦隊長外九  
十余名ノ尊キ御霊ノ冥福ヲ祈リ建立ス

生存者有志』

## 日支事変当初の

### 陸軍航空隊の活動

島根県 陶 山 友 也

父は隣村、三刀尾町栗田の生まれで、大阪の砲兵工廠に勤務中、私は大阪で生まれ育った。五歳の時、父と共に木次町に帰省し、小学校を卒業後、出雲市の旧

家遠藤嘉工門邸に奉公に出され、しつけを受けながら学業を終えました。

学校卒業後、出雲製織株式会社に機械工として働いた後、父の家業の板金職を手伝って、昭和十(一九三五)年徴兵検査を受け甲種合格で、翌十一年一月、現役兵として入隊しました。

入隊の時、兵科が航空整備兵と称する当時としては驚異な兵科に指定されていきました。私が板金職だったのが買われた兵科選定であったと思います。家族や故郷に別離を告げ広島に集合し、ただちに宇品港を出港し女界灘を三百人ぐらいの初年兵の引率者に従い大連港に向かって出航しました。乗艦と同時に小さな洗面器が各人に支給されました。航海途上船酔嘔吐のためでしたが、幸いにも大荒れにはならず、何とか無事大連港に到着しました。

大連港にて連隊長にわざわざ出迎えていただいたのは初年兵一同感激しました。ただちに満鉄で一路新京(長春)へと向かいましたが、当時としては満州はまるで夢の国で、遠い昔の日清・日露戦争の古戦場で

もあり、近くは満州事変の戦場でもあったこの広野を感無量で北上を続け、新京に到着しました。

大連の埠頭で働いている苦力が、着いている衣服からポロポロとシラミを落としてつぶしているのを見て全く驚きました。そして改めて異郷に來た実感を味わいました。

私が入隊したのは新京航空第十五連隊第二整備隊でした。すぐにチチハル教育隊に移ることになりました。教育隊は百人ほどの初年兵でした。

教育内容は徒手教練や体操、拳銃操作等でしたが、耐寒気合入れのためかよく叩き殴られました。それも個々にやられることなく集団ビンタが多かった。おかげで寒さを感じる暇がなかったと思います。

教育は一カ月ほどで終了し、新京の原隊に復帰しました。

新京航空第十一連隊は九四式偵察機が二十機ほどの規模でした。

九四式偵察機は復葉機、最高時速一六〇キロ、二人

乗り（一人は操縦手、一人爆撃、機銃操作）、銃弾はプロペラの回転の間隙を縫って発射される。

当時空軍は十六個連隊、操縦者は操縦学校卒業者を以て充当。当時、満州上空は寒気がひどく飛行者は電熱航空服を着用しないと飛行出来なかった。整備兵は飛行機のエンジンの調整が仕事であった。私はそのほか機体の弾痕等の板金修理を受け持った。機体はジュラルミン製で弾痕等は溶接でなくカスメ工法で修復しました。当時（昭和十一年）の空軍は全く初期であって、陸軍で十六個連隊でしたが、近い将来、現在の六十六倍の規模を計画しつつあるとの事でした。

当時の飛行機は、寒い時は自動車のようにクランクを回し始動を行なった。クランク回しは手動で、自動車を機首に密着させて始動回転を行う方法で行われました。

積載爆弾は五〇キロで両翼に各五個、計十個を搭載し、信管は瞬発信管と二動信管を装着した爆弾を使用しました。

戦隊は、偵察・爆撃・戦闘と三戦隊に区分されて

各々の目的に応じ戦闘隊が出動して戦闘に参加しました。

中隊は一時、熱河省にも駐留することになりました。有名な万里の長城は始皇帝以前から築城が始められ、蒙古族の南下侵略を防ぐと共に、当時から蒙古族の宗教改革による好戦的風習の変化を期待し、ラマ教の導入普及に力が入れられたと伝わっていました。

再び新京に帰った際、将校一人、兵三人（私を含む）が選ばれソ満国境監視偵察隊要員が派遣されました。黒河からさらに東へ四〇―五〇キロ離れたブラゴエという国境線の僻地でした。赴任の途中、大雨で列車が運行出来ず、列車を降りて徒歩で行軍した苦労にも遭遇しました。その際、空腹を満たすため満人に乞うてキュウリの漬物を食べて空腹を満たし、難行を続けて任地に赴いた。交代で対岸のソ連領内の状況を監視を続け、将校の方が毎日暗号電信で状況を送信する。監視は極めて精度の高い望遠鏡を監視小屋の小さな隙間から望見、監視を交代で続ける日課でした。

黒竜江もこの地区では川幅も広く、ソ連の江防艦（小型駆逐艦）も時々航行しているのが視界に入った。住民の木材搬出の筏が、筏の上に小さな小屋を組んで家族共々乗せて、ゆっくり下流に向かって去って行く風景も、平凡な監視業務に「変化」の楽しみを与えてくれた。四人の監視隊の食事は雇われた満人の中年の女が担当し、この女は纏足で幼女と二人で暮らしていた。

黒竜江は雄大な流れの大河で、その流れの一番深い所が国境線と定められていて、時々流れの深部が左右に移動し国境問題に悶着を生じた。また流れの中に砂金層が含まれているという噂が時々聞かれた。

この辺境の国境守備隊に、先年の二・二六事件の反乱軍の兵卒が配流の身を寄せ合って守備の任に当たっていた。

この辺境の国境監視の任務も解かれ新京に帰途、哈爾濱市を経由した。哈爾濱市は旧満州の小さな一部落であったが、明治末期から大正初期にかけて、革命の流血に追われた日系露人が、肅正の嵐から逃れ、命を

かけて避難し、永住の地を求めて定着したのが現在の哈爾浜の市街であると聞く。西欧のモスクワからこの遠い満州の国境の地まで、大シベリアを流浪の旅を続け、身一つになってやっと安住の地の果てに落ち着いた彼らの街であった。

新京の原隊に帰ると落ち着かぬ間に、今度は急ぎよ天津に移動することとなった。移動途中、山海関を通過する頃、支那事変の発端を聞かされ、そのための天津移転であることも知った。そして私達が事変の渦中にあることも知った。その夜、天津の宿舍は暴徒たちの襲撃を受け驚いたが被害はなく安堵の胸をなでおろした。

事変は発端後、日々拡大されて留まる所知れなかつた。隊は山西省臨汾という僻地の飛行場に三―四機で分遣することとなった。鉄道はここでは狭軌で車体もやや狭く少なかった。臨汾は太原の南方の小さな街にある飛行場であった。地上部隊も少なく整備も不十分で、共産八路軍の出没する地区で、われわれ航空隊の

整備員も本来の任務のほかに、衛兵勤務や巡察隊勤務と、今までと異なった任務が加わって日々の生活勤務に緊張度が加わって来た。

毎日のように付近の部落が共産匪の襲撃を受け、手榴弾・迫撃砲・小銃弾等の銃弾の音が耳に届く日が続く。時々、苦力を使って飛行場の滑走路の整備や滑走路周辺の草刈等も行う。また時々、下給品としてミカン、たばこ、日用品の支給を受けた。また故郷の父母、親族から慰問袋の支給を受け懐かしさに涙することもあった。

#### 当時の日記

一月十二日、午前六時起床。八時、無蓋車に便乗、运城に向かう。途中の各駅には我軍の戦死者の墓標がたくさんある。過ぎし日の激戦地がしのばれる。駅には金網が張られ匪賊の侵入、手榴弾を防止するのが目的だ。

夕方七時、运城着。同地の航空隊幕舎に宿す。运城は山西省の南端、塩の産地、製粉工場あり。共産軍は

我軍が運城の占領し塩を押さえたため、塩の入手が断たれ困っているとのこと」。

三月四日、南苑飛行隊に帰隊、我々三年兵満期除隊の話題が噂に出る。現地除隊、満空会社、満鉄など話題に出る。

三月十三日、血痰のため北京陸軍病院入院。

四月二日、内地送還予定が告示される（この日の日誌）残念だ。思えば丸三年、北満の原野に、ソ満国境に、支那事変に出動、天津、南苑、内蒙に、また山西に黄河に近い運城に戦線数百里、満期を目前に控え、今このような病氣となり内地に帰るとはまさに残念だ。俺の一生はやり直した、あきらめぬよう全快すればまたこの北支に来て働く。

四月十二日、広島陸軍病院難分院入院。

五月九日、名古屋東練兵場分院に転院。

七月十四日、名古屋陸軍病院下呂町転地療養所に転送。

九月七日、名古屋東練兵場分院に戻る。

入院生活一九六日目に退院、岐阜県内に所在する

本田部隊野田隊内所属する（飛行集団）。

十月十五日、外泊許可、木次に帰省。京都、東京等を見聞旅行を楽しむ

十月二十三日、帰隊。

十月二十五日、仙台における航空部隊演習に参加。

十一月十三日、仙台演習終了、名古屋帰隊。

十二月一日、召集解除。

父の家業を手伝って暮らし今日に至る。

この日誌で、事変当初は戦傷病者の治療が親切丁寧であったことに気付く。敗戦で終わったこの戦後の世相と異なる感じが深い。帰郷後、家業の板金を業とし静かな老後を送っている。